

2021年10月

聖句随想・折々の言（ことば）

－筑豊に生きる人－

「犬養光博先生から問われていること」

牧師 森 言一郎

呪われるべき傲慢な者をとがめてく  
ださい あなたの戒めから迷い出る  
者を。

（詩編 119 篇 21 節）

**母** 校・日本聖書神学校の「卒業生研修会」に  
Zoom という媒体でインターネットを使用  
して参加した。早起きしての移動の必要もなく楽  
な面もある。

だが、それだけでよしなのかというと、いささか  
複雑な思いを抱かざるを得ない。雑談も出来ない  
し、片隅での話も、無駄話もなし、駅弁の楽しみ  
もない。Zoom には独特の疲れがいつも伴う。

\*

今年の主題講演は 10 年程前までの半世紀近く、福岡県の筑豊地方の炭鉱があった地域に根差した歩みをされた犬養光博先生、81 歳だった。かつて私は九州教区にも居たのだが、じつくりと先生のお話を聴かせて頂くのは始めてだった。

犬養先生。現在は開拓伝道された福吉伝道所を閉じ、一線を引かれて長崎県松浦市にお住まいだが、まるで今も、筑豊の炭田地帯での宣教に生きておられるかのような、力溢れるお話をして下さった。

犬養光博という方が初めて筑豊に出会われたのは、1961 年・昭和 36 年だという。私が生まれた翌年のことである。切っ掛けは、「筑豊の子供を守る会」のキャラバンに加わったことだと伺った。

「ぼくは、筑豊との出会いが自分のあり方を決定した、と思っている」という言葉が、犬養光博という人を貫いている。果たして、これに類比する

言葉を私は自分の人生の中に見いだせているだろうか。

\*

**日** 本の復興を支えて来た石炭から石油へという流れの中、石炭産業の行き詰まりによって炭鉱閉山後の筑豊の民衆の困窮、窮乏が起こり始めていた。若き日の犬養先生は、人々の苦しみの根っこに何があるのかを考えないでは居られなかった。

見て見ぬ振りには出来ない誠実さが先生にはあったし、もはや、そこから逃げ出すことは出来ないことを悟られたのだろう。キリスト教会はどこに立つべきであるのか、約半世紀にわたって、誠実に向き合い続けることになる。

\*

**戦** 後の高度成長期の時代を生き抜かれた「社会的宣教活動者」のおひとりとして、その

生き方、靈性について、時に、涙をハンカチで拭いながら語り続けられた。犬養先生は、ご自身の歩みを本当に謙虚に語られたと思う。わかっているつもりでいても、何もわかっていなかったこと。見えていなかったことも率直にお話された。先生の最初のご著書は筑豊に入られて 6 年目『筑豊に生きて』だった。1971 年のことである。

『筑豊に生きて』が発行されたときに、お世話になってきたという先輩に当たる小柳伸顕牧師から「犬養、これおかしいやろ。なんで筑豊のお前の教会での話に、大阪弁が出てくるや。」と指摘され、最初はその意味がわからなかった、と言われたのだった。

筑豊に住まわれて 5 年。「教会は確かに筑豊に立っていたが、教会の中に筑豊はあったのだろうか」「教会はどこに立っているのか」という問いとの明確な出会いだったと語られた。

当然、その問いは私たちにも向かう。突きつめて言うならば、「あなたの教会（私で言うなら旭東教

会となる)は孤独と格差と差別に苦しむ市井の人との関わりをどこに見いだしているだろう。教会の中に、その方は、今、共に居られるだろうか」ということになる。

\*

**深**く共感し、教えられたことは他にもある。福吉伝道所を拠点としての宣教活動の「土台」に関わるお話を、犬養先生は、講演の冒頭 10 分程語られた。その内容は次のようなことだった。

ご自身、長年、無教会派のリーダー・故 高橋三郎先生の 2 時間にわたる聖書講義のテープを取り寄せては、同労者や仲間たちと、背筋を伸ばして聴き続けたと語られたのだ。

そして、高橋三郎先生の聖書講義を、初めて、じかに聴きに行った時に、稲妻が落ちるかのように「聖書の権威を教えられた」とも言われた。「あぐらをかいて、高橋先生の聖書講義を一番後で聞いていたら、講義の最後に、手厳しく叱られた」そ

うだ。おそらく、「聖書の学び抜きに、筑豊での現場の歩みはあり得なかった」ということを表現されようとしたのだ。

\*

**神** 学校を通じて、事前に犬養先生の略歴と講演のレジュメが配布されていた。そこで目に止まったのはキリスト教雑誌『福音と世界 1991年3月号』だった。

探して読んでみた。そこには「詩篇が好きで学びを続けて来た」と書かれている。特集、『日本基督教団の50年』の中の「関わりの中で問われた教会」の終盤の言葉である。

\*

**先** 生は、呪いの祈りが含まれる、詩編の120篇2節を引用しながらこう記された。「偽って語る唇から欺(あざむ)いて語る舌から助け出してください」という呻(うめ)きのある所に教会は

存在しなければならない。イエス様に会うために」と。

犬養牧師が詩編を愛されるのには理由(わけ)があるのだ。詩編詩人の呪いの祈りは、どこから、誰に向けて、どのように発せられたかを、ずっと求められていたのではないか。

犬養光博先生は決して社会活動家などではなかった。ただ、ナザレのイエスに従おうとされた結果、聖書に学ぶこと抜きに、聖書の権威に従うこと抜きに、筑豊で信実な言葉を語り得ない、ことに気付いておられたのだと思う。

\*

**私** たちも教会で詩編を学び続けているが、犬養先生の言葉に触れると、はっとすることがある。既に学んだ呪いの祈りが含まれる詩編もあるが、全く気付かなかった読み方・文脈ががあることを知らされたように思う。

今、116 篇を学んでいるから、最も長い詩編 119 篇を読み終えたと、冬には、旭東教会でも 120 篇を学ぶ予定だ。そこにはどのような世界が見えて来るのか。何が聞こえて来るのだろうか。

\*

**研** 修会のさいごに、御礼を兼ねて、ひと言、言葉にさせて頂いた。「かつての筑豊と同じ状況に重なる何かを、コロナ禍に生きる私たちはどこに見いだせるか、引きよせて考えました」と。

コロナ禍ということもあるし、そうでなくとも、今、決して遠くない所に呻きや嘆きはある。そこから目を背けることなく、耳を閉ざすことなく歩んで行きたい。(完)